学位論文要約

文学教育における読書行為の研究

丹藤　博文

Ⅰ.論文題目

文学教育における読書行為の研究

Ⅱ.論文構成

序　研究の背景・目的・方法
第Ⅰ部　読書行為論の系譜
　第一章　文学の機能としての読書行為
　　第１節　言語の機能をめぐって――西尾・時枝論争――
　　第２節　行為へのいざない
　第二章　文学教育における現実化（アクチュアリティー）の探究
　　第１節　現実・形象・認識――現実認識・変革――
　　第２節　文学体験の成立――問題意識喚起――
　　第３節　主体と状況――状況認識――
　第三章　読者と行為
　　第１節　読みにおける形象の問題――主観・客観論争――
　　第２節　読者の発見――十人十色――
　　第３節　創造の読み――言語行動主体――
　第四章　読書行為論の課題
　　第１節　読みにおける感動の問題
　　第２節　行為と行動のあいだ

第Ⅱ部　読書行為の理論
　第一章　言語論的転回の地平
　　第１節　言語論的転回とは何か、なぜ言語論的転回なのか
　　第２節　読むことの転回
　　第３節　現実化（アクチュアリティー）から行為遂行（パフォーマンス）へ
　第二章　行為遂行（パフォーマンス）の基礎理論
　　第１節　言語と行為
　　第２節　文学と行為
　　第３節　物語と行為
　第三章　言語論的転回による読書行為論の再構築
　　第１節　言語論的転回以後の読みの地平
　　第２節　読みにおける主体とは何か
　　第３節　方法としての読み

第Ⅲ部　読書行為の方法
　第一章　行為遂行（パフォーマンス）の方法
　　第１節　ナラティヴ・メソッドとは何か、なぜナラティヴ・メソッドなのか
　　第２節　読書行為を生成する語り
　第二章　ナラティヴ・メソッドの分析

第１節　ナラティヴ・メソッド①　形式に着目する―『スイミー』―
第２節　ナラティヴ・メソッド②　出来事の展開の仕方をとらえる―『おてがみ』―
第３節　ナラティヴ・メソッド③　登場人物の変容を読みとる―『大造じいさんとがん』―
第４節　ナラティヴ・メソッド④　機能をとらえ指標を掘り起こす―『ごんぎつね』
第５節　ナラティヴ・メソッド⑤　語り方を読む―『ごんぎつね』―
補説　視点と焦点化
第三章　ナラティヴ・メソッドによる教材分析
第１節　『アレクサンダとぜんまいねずみ』（レオ・レオニ）
第２節　『おにたのぼうし』（あまんきみこ）
第３節　『少年の日の思い出』（ヘルマン・ヘッセ）
第４節　『走れメロス』（太宰治）
第５節　『故郷』（魯迅）
第６節　『なめとこ山の熊』（宮澤賢治）
第四章　ナラティヴ・メソッドの可能性と課題
第１節　ナラティヴ・メソッドはどのようなことをなすのか
第２節　ナラティヴ・メソッドの課題

結語　言葉は世界を変える
―「文学国語」、発達障害・ＬＧＢＴＱ・日本語を母語としない児童との共生―

文献　文学教育関係主要参考文献
資料　『日本文学』国語教育関係論文総目録　1949年7月～2009年8月

Ⅲ.研究の背景および目的と方法

(1)研究の背景

①学術的観点

戦後の米ソの対立・植民地支配・朝鮮戦争といった政治的に不安定な時代に、またアメリカ合衆国直輸入の経験主義やプラグマティズムに対する疑問といった状況の中で、本格的な文学の教育への期待が高まっていった。この時代支配的な思想であったマルクス主義のリアリズム論・反映論をベースとし、「人間変革」・「社会変革」が企図されていた。戦後の民主主義を担う児童・生徒の育成が求められていた。文学による「人間変革」・「社会変革」を強力に推進したのが日本文学協会に集う若き文学研究者や教師たちであった。娯楽や教養のレベルにとどまるのではなく、人間を内面的に変革するという文学の機能が探究された。文学を読むことで感動する、感動を体験することによって世界や人間に対する認識を深めるという文学体験論が確立された。このことを【第一段階】とするなら、【第一段階】は、具体的・現実的な行動に移されることもある。このことを【第二段階】とすると、【第一段階】＝読書行為（感動体験・文学体験）から、【第二段階】＝行動へと移行することが文学教育とされたのである。荒木繁の、所謂「問題意識喚起の文学教育」は、この【第一段階・行為】から、【第二段階・行動】への展開を具体化した実践として高く評価された。読書行為の成立をもってして、ただちに行動への移行が果たされるものではないが、益田勝実の現実認識・変革、大河原忠蔵の状況認識の文学教育は、【第一段階・行為】ではなく【第二段階・行動】を志向していた。

しかし、マルクス主義の後退、社会主義国への幻滅といった世界的な潮流の中で、日本文学協会が推進する文学の機能としての「人間変革」「社会変革」に対する疑問や批判も出されるようになった。文学教育を推進する内部からは、「人間変革」と言われても授業で具体化することの困難さが言われ、問題意識喚起・状況認識といった文学の機能への疑問も出されるようになる。文学教育に批判的な外部からは、1970年代に自民党による児童文学攻撃があり、1980年代には感動は教育できないとして読み方の技術を教えようとする読解主義・読み方指導が主張されるようになる。「文学教育」は特定の思想教育として非難され、【第一段階・行為】から【第二段階・行動】への要である「感動」体験そのものが公然と批判されるようになる。1980年代以降学級崩壊、いじめ、不登校といった教育問題が噴出する中で、人間変革よりも読み方指導・読解主義へと時代は流れ、文学教育も対応を余儀なくされていった。【第二段階・行動】よりも【第一段階・行為】へと文学教育の比重はシフトしていったのである。一方で、【第二段階・行動】を尊重しつつも、【第一段階・行為】の重視を求める立場もあった。太田正夫は、1960年代から教室の読者たちの読みの多様性に意味を見出そうとしていたし、田近洵一は児童・生徒の読みの成立のための読書行為論の理論化を試みていた。1980年代以降、世界的に活況を呈し、日本にも輸入された記号論・構造主義・受容理論・読者反応批評といった言語・文学理論は、読みに正解があるとする正解到達主義もしくは客観主義を否定した。長く国語教育における読み方指導の理論的支柱であった解釈学は根拠を持ち得なくなった。読者による読みの創造性や多様性は自明なものとなった。

国語教育の現場では、今も百年も前の解釈学的図式を出ていない。最大の問題は、言語の教育でありながら言語論的転回に応じていない点にある。したがって、文学教育に、いま、求められることは、戦後文学教育の到達点であり、児童・生徒をふまえた文学体験論・読書行為論を言語論的転回の立場から再構築する、あるいは批判的に乗り越えるということであろう。読む対象としてのテクストとは実在する実体ではなく、インクのシミにすぎない。読むとは、読者による一回限りの現象でしかないという言語論的転回以降の地平から、読者の内的な感動体験の生成と読みの深まりに目を向け、そのための方法を構築することが必要である。読者の内面的な反応や感動を問題とし深めることなしには読解力も身に付かない。内面を問題としない読解主義では読解力は養えないというのが本研究の立場である。文学教育が軽視した〈方法〉、読解主義が遠ざけた内面的な〈感動〉が交差する場に教室の読みの可能性を見い出したい。

②状況論的観点

2019年12月に公表された国際学習到達度(PISA)調査において、日本の児童・生徒の読解能力の低下が指摘された。全国学校図書館協議会と毎日新聞社が毎年実施している学校読書調査（2019年11月1日）によれば、1カ月に1冊も本を読まない「不読者」の割合は、小学生6.8％、中学生12.5％、高校生55.3％であり、学齢が上がるにしたがって本を読まなくなるという実態が明らかになっている。また、内閣府の調査は、小・中学生で半数以上、高校生のほぼ全員がスマートフォンを所持し、1日の利用時間は1人平均2～3時間、多ければ5～6時間にもなると報告している。一方、文部科学省はデジタル教材を教科書として認める通達を出し、学校へのスマートフォンの持ち込みを禁止するとの措置を解除した。さらに学校におけるICT化をいっそう推進するとの方向性を打ち出しており、2021年度から児童・生徒には端末が貸与されることになっている。児童・生徒の日常生活のみならず学校における言語生活においても、ICT化は当然のこととされ推進されようとしているのである。しかし、デジタル教科書への批判やICT化への懸念も表明されていることを見逃してはならないだろう。直接的な対面による会話や手書きでの作文に比して、スマートフォンやパソコンによるコミュニケーションや文章作成においては脳の前頭前野の機能低下が認められるとのデータもある。ICT化の波と電子器機の急速な普及、それによる言語

生活の変化は、はたして児童・生徒のリテラシーの発達に影響を与えないと言い切れるものかどうか。言語と思考は不可分であることから、言語力や読解力の衰退は思考力の低下につながることは疑いを容れない。情報化社会・メディア時代と言われる今日においてこそ、言語力・読解力・思考力を養うことは学校教育における喫緊の課題である。

（2）研究の目的

戦後文学教育における読書行為論を、言語論的転回・文学理論により批判的に検討することで、新たな読書行為論を構築する。また、教室における読書行為成立のための読みの方法を提案する。

（3）研究の方法

①第Ⅰ部・先行研究。文学の機能を探究した文学教育論の系譜をたどることによって、読書行為にとって明らかになった課題とは何かについて述べる。

②第Ⅱ部・理論研究。読書と行為との関わりを原理的・理論的に明らかにする。言語論的転回以後の言語論・文学理論の観点から、田近洵一（言語行動主体の形成）の読書行為論を取り上げ批判的に検討する。

③第Ⅲ部・教材研究。読書行為成立のための方法としてナラティヴ・メソッドを提案し、教科書教材を例にしながらテクストの行為を可視化するための分析方法について具体的に検討する。

(4) 研究の特色および成果

①児童・生徒の内面的な感動を喚起する読みの方法の必要性

戦後の文学教育の理論的な背景はマルクス主義であり、【第一段階・行為】から【第二段階・行動】への可能性を最大化しようとするものである。しかし、世界的にマルクス主義への疑問が出され構造主義への移行がなされていくと、【第一段階・行為】から【第二段階・行動】への可能性は最小化されるようになる。読みの技術を教えることを専らとする読解主義の提唱である。しかし、この読解主義は児童・生徒の内面的な感動を捨象してしまう。一方、文学教育は読みの技術および方法を軽視する傾向にあった。読者の知情意といった内面的な感動を無視したところには体験としての読書行為は成立せず、読解力も養われるものではない。そして、読書行為の成立といった目的のためには方法が不可欠であることは言うまでもない。したがって、読者の内面的な感動を喚起する読みの方法論を構築することが読書行為の成立を促し、児童・生徒の言語力・読解力の育成に有効である。歴史的な経緯をふまえつつ、本研究が明らかにし強調するところのものである。

②言語論的転回による読書行為論の再構築

次に本研究のオリジナリティは、読書行為論を言語論的転回の視点から再構築するところにある。戦後の文学教育は、文学理論とは異なり、読者を読みのメカニズムの要素としてとりあげた点に特徴がある。文学体験論の成立である。しかし、マルクス主義の反映論をベースとした文学論では、読みは客観的なものであり読者の読みと作品上の読みというように二元論的に分けられる。したがって、読者の読みそれ自体に意味は見い出されず、「客観的読み」「正しい形象」に近づくものでなければならないとされるのである。文学教育においては、【第一段階・行為】よりも【第二段階・行動】が強調されることがあるのはこのためである。しかし、言語論的転回による構造主義やテクスト論によれば、読みとは「還元不可能な複数性」（ロラン・バルト）を特徴とする。言語実体論に依拠した二元論的読みは、教室の読者の読みの多様性や創造性とは矛盾することになる。読みとはテクストに戻ることはなく、読者の内面に生成される一回性の現象でしかない。言語実体論による二元論的な読みの理論は破棄されなければならないのであり、読者の内面に生成される一回性の読みを深める以外に【第二段階・行為】にいたる道はない。これが本研究の結論である。言語論的転回の地平から戦後文学教育の産物である文学体

験論もしくは読書行為論を批判的に再構築したことに学術的な意味があると考える。

③テクストの行為を可視化するための方法（ナラティヴ・メソッド）の提案と教材分析例

文学テクストの行為を可視化するための方法論を提案した。言語も文学も理論上行為遂行的であることが明らかになった。言語はその使用や効果によって言語である。それゆえ、文学教育においてはテクストの行為を可視化することが文学を文学として読むということになる。読解のための分析ではなく、読者による感動を深め読書行為を成立させるものでなければならない。テクストの行為を可視化する読みの方法として〈ナラティヴ・メソッド〉を提案し、具体的な教科書教材の行為を明らかにした。文学教材の行為遂行性（パフォーマンス）を追究し読みとして具体化することは本研究の特色であり授業実践上有効である。

Ⅳ.本論の要約

序説

第Ⅰ部　読書行為論の系譜

第一章　文学の機能としての読書行為

第１節　言語の機能をめぐって――西尾・時枝論争――

戦後直後、西尾実の文学教育論には時枝誠記とのあいだで繰り広げられた論争を通して、文学の機能面への着目がなされていたことを指摘し、読書行為論の嚆矢として位置づけた。

第２節　行為へのいざない

植民地支配の中での経験主義教育への疑問から、文学教育への期待が高まりつつあった。この時代、桑原武夫『文学入門』によるフランス流の人文学の社会への有効性が主張され受け容れられていった。また、この時代のメルクマールであったマルクス主義の変革のための文学が「行為へのいざない」として主張された。「社会変革」「人間変革」の可能性としての文学教育について明らかにした。

第二章　文学教育における現実化（アクチュアリティー）の探究

第１節　現実・形象・認識――現実認識・変革――

教養や娯楽としての文学といった、それまでの概念を打ち破り、益田勝実は定時制高校の実践をもとに、社会変革という文学の機能を具体化する方向を示した。近代的な学校という制度的枠組みから脱却し、学校づくり・コミュニティーづくりという文脈の中で生徒たちが現実を認識し変革していくための文学教育という可能性を示したのである。戦後の文学教育の指針を打ち立て、方向性を示した益田勝実による文学教育論の可能性を明らかにした。

第２節　文学体験の成立――問題意識喚起――

1953年日本文学協会大会における荒木繁の「民族教育としての古典教育―「万葉集」を中心として―」は、国語教育史上画期的な実践として評価される。生徒たちは、抵抗について論争をしたり、勉強会を開いたり、農村へ調査に赴いたりするといったように行動まで起こしたのである。文学の機能の具体的な発現として注目された。西尾実によって、「問題意識喚起の文学教育」とされ広まっていく。しかし、大会での討論およびその後の座談会を通じて、疑問や批判が出されもする。それは、文学と教育に関わって不可避の問題の発見でもあった。その顕在化した問題を考察した。

第３節　主体と状況――状況認識――

益田勝実の現実認識・変革の文学教育論を継承した大河原忠蔵の状況認識の文学教育論を取り上げる。状況認識の文学教育論は、文学のアクチュアリティーを最大限追究しようとするものであったが、文学の読みの教育を状況認識に特化し先鋭化したために、疑問や批判を招いたことも事実であ

る。それら批判を参照しつつ、状況認識の文学教育論とは何であったか。その可能性と課題について検討した。

第三章　読者と行為

第1節　読みにおける形象の問題

主観・客観論争として知られる荒木繁と奥田靖雄との論争を通して、この時代読むことはどのようにとらえられていたのか、また読みにおける読者の役割はどのように考えられていたのかを明らかにし、言語観・文学観再検討の必要性を説いた。

第２節　読者の発見――十人十色――

読者の主体性を文学体験として位置づけ、児童・生徒の読みの多様性に着目した太田正夫の十人十色の文学教育論について、読者論の嚆矢としてばかりでなく、その読書行為の内実を検討することで、読者の主体性とテクストとの交流にはらまれる問題を可視化した。

第２節　創造の読み――言語行動主体――

読む・書く・聞く・話すという言語行動における主体の役割に着目し、読みの創造性を指摘した田近洵一の読書行為論を見ていく。読みにおける主体への着目は他者の重要性という他者論へ展開する。その理路と課題を明らかにした。

第四章　読書行為論の課題

第１節　読みにおける感動の問題

戦後の文学教育は文学の機能の具体化として「人間変革」や「社会変革」を主張した。読みにおけるそのような機能の具体化の理論的根拠は、文学体験の成立すなわち感動体験の如何にかかっている。しかし、80年代の文学教育批判は、その感動体験を無効にした。そこで、読みにおける感動とは何かを理論的に述べた。

第２節　行為と行動のあいだ

文学教育は、行為としての読みを重視する立場【第一段階・行為】と読みから行動変容まで求める立場【第二段階・行動】とに大きく分かれる。後者は、読みにとどまってはならないとして前者を批判してきた。文学教育は読みそのものの充実にとどまるのではなく、行動変容（社会変革）を標榜するものでなければならないとしたのである。しかし、【第一段階・行為】なくして【第二段階・行動】もないことは自明であり、感動を深めることが行動変容へ至る唯一の道であることを述べた。

第Ⅱ部　読書行為の理論

第一章　言語論的転回の地平

第１節　言語論的転回とは何か、なぜ言語論的転回なのか

20世紀の言語論の転回をふまえて言語の教育としての国語教育の言語観を批判に考察する。そのうえで、記号論・構造主義といったポスト・モダンの思想に影響を与えた言語論的転回とは何か、国語教育において言語論的転回に立つことの意味について考察した。

第２節　読むことの転回

20世紀の言語論・文学理論の進展によって、読むことがどのように転回したかについて、テクスト論・受容理論・読者反応批評などに拠りながらまとめた。そして、国語教育に支配的な解釈学的図式および言語実体論を批判した。

第３節　現実（アクチュアリティー）化から行為遂行（パフォーマンス）へ

言語論的転回以後の言語実体論を批判したうえで、読むことはどのように変容を遂げたのかについて、作者・作品・読者の視点から明らかにする。そして、文学教育理論において現実性（アクチュアリティー）から行為遂行（パフォーマンス）へ移行すべきことを論じた。

第二章　行為遂行の基礎理論

第1節　言語と行為

J.L.オースティンの発話行為論に拠りながら言語活動それ自体が行為遂行的であることを明らかにするとともに国語教育の言語観を検討した。

第2節　文学と行為

オースティンが発話行為論から文学を除外したことを批判し、文学もまた行為遂行的であることを述べたうえで、虚構の言説の行為遂行について述べた。

第3節　物語と行為

物語論(narratology)において、世界の意味を制作するという視点から、物語はどのような行為を遂行するのかについて概説した。

第三章　言語論的転回による読書行為論の再構築

第１節　言語論的転回以後の読みの地平

言語論的転回の観点から国語教育において必要な枠組みを次の四つにまとめて示した。

(1)言語は実体ではない。

(2)世界は言語化されている。

(3)言語は行為遂行的である。

(4)読書行為 には読者が不可欠である。

第２節　読みにおける主体とは何か

戦後文学教育において主要な問題であった読みの主体について、構造主義以降の主体論を参照しつつ、実体論的把握ではなく行為論的把握の必要性について論述した。

第３節　方法としての読み

文学教育は、指導過程については議論してきたものの、読みの方法については、否定的であったことは否めない。読解指導や読み方指導といった行為性抜きの教育に対る反発もあった。しかし、読みを読者の主体的な行為として具体化するための方法論が必要である。田近洵一の読書行為における方法を語論的転回の立場から批判的に検討した。

第Ⅲ部　読書行為の方法

第一章　行為遂行の方法

第１節　ナラティヴ・メソッドとは何か、なぜナラティヴ・メソッドなのか

20世紀の物語研究の成果をふまえ、義務教育段階での物語の読みの教育への汎用性を意識して、本研究において物語とは何かを示した。

第２節　読書行為を生成する語り

2012年から中学校国語教科書においても取り上げられた語りとは何かを明らかにした。語り論自体は、20・30年前から文学研究の方法となっているが、国語教育における読みの方法論としても必須であることを説いた。

第二章　ナラティヴ・メソッドの分析

物語教材分析のための方法としてナラティヴ・メソッドを提案した。

第１節　ナラティヴ・メソッド①　形式に着目する
第２節　ナラティヴ・メソッド②　出来事の展開の仕方をとらえる
第３節　ナラティヴ・メソッド③　登場人物の変容を読みとる
第４節　ナラティヴ・メソッド④　機能をとらえ指標を掘り起こす
第５節　ナラティヴ・メソッド⑤　語り方を読む
補　説　視点と焦点化

第三章　ナラティヴ・メソッドによる教材分析

読みの方法としてのナラティヴ・メソッドによる教材分析例を具体的に示した。
第１節　『アレクサンダとぜんまいねずみ』（レオ・レオニ）
第２節　『おにたのぼうし』（あまんきみこ）
第３節　『少年の日の思い出』（ヘルマン・ヘッセ）
第４節　『走れメロス』（太宰治）
第５節　『故郷』（魯迅）
第６節　『なめとこ山の熊』（宮沢賢治）

第四章　ナラティヴ・メソッドの可能性と課題

第１節　ナラティヴ・メソッドはどのようなことをなすのか
ナラティヴ・メソッドの、戦後文学教育の歴史的な流れにおける役割、読書行為成立のための方法としての意味について述べた。
第２節　ナラティヴ・メソッドの課題
読みにおける感動の深化のためのナラティヴ・メソッドが、戦後文学教育が目指した【第一段階・行為】から【第二段階・行動】への移行を遂行するためには、【第一段階・行為】における感動から批評へと展開することが課題であることを述べた。

結語　言葉は世界を変える―「文学国語」、発達障害・ＬＧＢＴQ・日本語を母語としない児童との共生
発達障害・LGBTQ・日本語を母語としない外国人児童における文学教育の新たな可能性について論じた。

V.引用・参考文献

【文学教育関係】
蘆田惠之助(1987)『蘆田惠之助国語教育全集　7～11　読み方教育実践編』,明治図書.
荒木繁（1993)『文学教育の理論』,明治図書.
荒川有史(1976)『文学教育論』, 三省堂.
石井庄司(1960)『国語教育の指標』, 明治図書.
岩沢文雄編(1971)『感動体験を育む詩の授業』, 明治図書
岩沢文雄・安藤操編(1976)『感動の文学教育　全四巻』鳩の森書房.
大河原忠蔵(1982)『状況認識の文学教育』,有精堂.
大久保忠利(1969)『国語教育解釈学理論の究明』,勁草書房.
太田正夫(1989)『ひとりひとりを生かす文学教育』,創樹社.
(1996)『十人十色を生かす文学教育』,三省堂.

奥田靖雄・国分一太郎『読み方教育の理論』,国土社.
『国語教育の理論』,麦書房.
小野牧夫(1958)『国語・文学教育の研究』, 秀英出版.
垣内松三(1981)『國語の力』,有朋堂.
(1932)『文学理論の研究』,不老閣書房.
片上　伸(1973)『文芸教育論』,玉川大学出版部.
熊谷　孝(1956)『文学教育』,国土社.
久米井束(1966)『主体を創造する文学教育』,日本教図.
桑原武夫(1950)『文学入門』,岩波書店.
鴻巣良雄(1956)『文学教育の発見』,一粒社.
小海永二(1973)『文学の教育・詩の教育』, 有精堂.
国分一太郎他編(1957)『文学教育基礎講座1～3』, 明治図書.
輿水　実(1958)『読み方教育学』, 明治図書.
西郷竹彦(1965)『文学教育入門』,明治図書.
西郷竹彦・浜本純逸・足立悦男編(1988)『文学教育基本論文集　(1)～(4)』,明治図書.
三枝康高(1965)『文学の読解』, くろしお出版.
(1967)『文学教材の構造をつかむ読解』, 明治図書.
渋谷　孝(1988)『文学教育論批判』,明治図書.
須貝千里(1989)『〈対話〉をひらく文学教育』, 有精堂.
鈴木日出男監修(2006)『益田勝実の仕事5　国語教育論集成』,筑摩書房.
武田常夫(1964)『文学の授業』, 明治図書.
(1973)『イメージを育てる文学の授業』, 国土社.
竹長吉正(1979)『文学教育の坩堝』, 教育出版センター.
(1995)『読者論による国語教材研究　小・中学校編』, 明治図書.
田近洵一(1975)『言語行動主体の形成』,新光閣書店.
(1982)『現代国語教育への視角』, 教育出版
(1985)『文学教育の構想』, 明治図書.
(1991)『戦後国語教育問題史』, 大修館書店.
(1993)『読み手を育てる―読者論から読書行為論へ』, 明治図書
(1996)『創造の〈読み〉―読書行為をひらく文学の授業―』, 東洋館出版
(2013)『創造の〈読み〉―文学の〈読み〉の再生を求めて』, 東洋館出版
(2014)『文学の教材研究』, 教育出版.
田近洵一・浜本純逸・府川源一郎編『「読者論」に立つ読みの指導』, 東洋館出版.
田中実・須貝千里編(1999)『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ　全六巻』, 右文書院.
(2001)『文学の力×教材の力　全六巻』, 教育出版.
(2005)『これからの文学教育のゆくえ』, 右文書院.
(2012)『文学が教育にできること』, 教育出版.
丹藤博文(1995)『教室の中の読者たち―文学教育における読書行為の成立―』, 学芸図書.
(2001)『他者の言葉―文学教育おける批評行為の成立―』, 学芸図書.
(2014)『文学教育の転回』, 教育出版.

(2018)『ナラティヴ・リテラシー―読書行為としての語り―』, 溪水社.
チモフェーエフ(1953)『文學理論(1)』,青木書店.
鶴田清司(1996)『文学教育における〈解釈〉と〈分析〉』, 明治図書.
時枝誠記著・石井庄司編(1984)『時枝誠記国語教育論集Ⅰ・Ⅱ』, 明治図書.
都教組荒川教研国語部会著(1963)『批判読み』, 明治図書.
外山滋比古(1963)『近代読者論』. 垂水書房
(1968)『修辞的残像』, みすず書房
(1969)『読者の世界』, 角川書店
西尾　実(1929)『國語國文の教育』,古今書店.
(1950)『國語科教育学の構想』,筑摩書房.
西尾　実編(1969)『文学教育』, 有信堂.
日本教職員組合(1978)『国語・文学の教育』, 一ツ橋書房.
浜本純逸(1978)『戦後文学教育方法論史』,明治図書.
(2001)『文学教育の歩みと理論』, 東洋館出版.
林　尚男(1982)『文学教育における可能性の追求』, 教育出版.
飛田多喜雄(1984)『国語科教育方法論体系6　文学教育方法論』,明治図書.
府川源一郎(1985)『文学の《読み》とその展開』, 新光閣書店.
(1995)『文学すること・教育すること』、東洋館出版.
藤原和好(1981)『文学の授業と人間形成』, 部落問題研究所.
(2010)『語り合う文学教育』, 三重大学出版会.
松本旭他(1982)『文学教育の理論と実践』, 桜風社.
山元隆春(2005)『文学教育基礎論の構築』, 溪水社.

【言語論・文学理論関係】

ソシュール,フェルディナン.ド.(1940)『一般言語学講義』,小林英夫訳,岩波書店.
ウィトゲンシュタイン,ルードウッヒ.(2003)『論理哲学論考』,野矢茂樹訳,岩波書店.
バフチン,ミハイル.(1989)『マルクス主義と言語哲学』,桑野隆訳,未来社.
(1979)『小説の言葉』,伊東一郎訳,新時代社.
バンベニスト,エミール.(1983)『一般言語学の諸問題』,花輪光他訳、みすず書房.
オースティン, J.L. (1978)『言語と行為』,坂本百大訳、大修館書店.
ダンバー,ロビン.(2016)『言葉の起源』,松浦俊輔他訳,青土社.
ジェイムスン,フレデリック.(1988)『言語の牢獄』,川口喬一,法政大学出版局.
ピーター,バーガー他『現実の社会的構成』,山口節郎訳,新曜社.
フォースター,E.M.『フォースター著作集　8　小説の諸相』,中野康司訳,みすず書房.
リチャーズ,Ⅰ.A.『実践批評』,坂本公延訳,みすず書房.
バルト,ロラン.(1979)『物語の構造分析』,花輪光訳,みすず書房.
イーザー,ウォルフガング.(1982)『行為としての読書』,轡田収訳,岩波書店.
エーコ,ウンベルト.(1984)『開かれた作品』,篠原資明他訳,青土社.
(1993)『物語における読者』, 篠原資明訳,青土社.
イーグルトン,テリー.(1983)『文学とは何か』,大橋洋一訳,岩波書店.

カラー,ジョナサン.(2011)『文学と文学理論』,折島正司訳,岩波書店.
フィッシュ,スタンリー(1992)『このクラスにテクストはありますか？』,小林昌夫訳,みすず書房.
ド・マン,ポール(2012)『読むことのアレゴリー』,土田知則訳,岩波書店.
リオタール,フランソワ(1986)『ポスト・モダンの条件』,小林康夫訳,水声社.
プロップ,ウラジミル.(1987)『昔話の形態学』,北岡誠司他訳,水声社.
リクール,ポール.(1987)『時間と物語Ⅰ～Ⅲ』,久米博訳,新曜社.
ブース,C.ウェイン.(1991)『フィクションの修辞学』,米本弘一他訳,書肆風の薔薇
ジュネット,ジェラール.(1985)『物語のディスクール』,花輪光他訳,水声社.
シュタンツェル,F.(1989)『物語の構造』,前田彰一訳,岩波書店.
プリンス,ジェラルド.(1996)『物語論の位相』,遠藤健一訳,松柏社.
ホワイト,ヘイドン.(2013)『メタヒストリー』,岩崎稔監訳,作品社.
前田　愛(1989)『近代読者の成立』,筑摩書房.
上野千鶴子(2001)『構築主義とは何か』,勁草書房.
船木　亨(2016)『現代思想入門』,筑摩書房.
野家啓一(1996)『物語の哲学』,岩波書店.
藤井貞和(2004)『物語理論講義』,東京大学出版会.